

序 説

装置の性能向上や撮像シーケンスの進歩もあり、臨床現場においてMRIによる画像診断は欠かせない存在となっている。なかでも循環器領域のMRIは、近年多くの革新的技術が導入されてきている分野であり、日本循環器学会の多くの診療ガイドラインでも高い推奨クラスを得ている。

しかし、臨床でのニーズは高まっている一方で、わが国における心臓MRI検査の臨床活用は、まだまだ十分とはいえない。その原因としては、心臓MRIが特殊な検査のため、撮像を担当する放射線技師の経験が不足していることや、検査時間が他領域の検査よりも長くかかるため、通常のルーチン検査枠内に収まりにくいという運用上の問題がある。また、それらと同時に放射線科医の本領域への関心の低さが大きな問題点として挙げられる。

多くの施設では心臓MRIは比較的まれな検査であり、日々の読影業務に忙殺されることの多い放射線科医にとって、特殊な領域の画像診断についての勉強は後回しにされがちである。ベテランの画像診断医が心臓MRIについての十分な知識をもっていなければ、当然若い世代の放射線科医への教育も進まず、ますます心臓MRI検査が特殊なものとして、放射線科医に敬遠されるといった事態に陥りかねない。

しかし、高齢化が進むわが国において循環器疾患は年々増加しており、今後ますます心臓MRIに求められる役割は拡大すると予想される。そんななか、心臓MRIについての正しい知識をもち、臨床で積極的に活用し、患者に有益な情報を主治医に提供するのは、Doctor's doctorであるわれわれ放射線科医に与えられた重要な任務である。画像診断医として、頭部のMRIをある程度読影できるのは当然であるように、今後は心臓MRIについても最低限の知識と読影能力は求められるべきであると筆者は信じている。特に若い先生方は、まだ詳しい放射線科医が少なく、これからニーズがより高まるであろう心臓MRIに精通することで、診断医としての個性、独自のアビリティの1つを得ることができると思われるので、ぜひ勉強していただきたい。

本特集では、「心臓MRIの今までとこれから」というテーマに沿って、心臓MRIにおいて重要な項目である、心筋壁運動、心筋虚血、心筋組織性状の評価と心大血管血流解析についてエキスパートの先生たちに解説していただいた。いずれも初学者に知ってほしい基本的な内容から、近年の技術進歩により可能となった最新の話題まで、幅広く網羅した内容となっている。限られたページ数のなかで、心臓MRI検査の入り口から、その奥深さまでを覗きみることができる大変充実した内容であり、読者の診療の一助になるものと確信している。本特集をきっかけに心臓MRI検査に興味をもっていただき、画像診断医としての新たな武器を身に付けていただきたい。

最後に、お忙しいなかご執筆くださった先生方に、心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

城戸倫之